

令和5年3月20日

南の風472

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

本号では、471号の試合経過、結果からクリティカルモーメントが何処にあったか探してみたいと思います。この試合では流れが大きく動いた、第4Qに限定して進めます。読者の皆さんもぜひご自分で、クリティカルモーメントを探ってみてください。

第4Qが始まる前のスコアは、Aチーム23-22Bチームです。

第4Qの出だしから、Bチームがオールコートプレスを仕掛けます。これが功を奏しAチーム24-Bチーム30と逆転します。ここでAチームがタイムアウトです。

タイムアウト明け、Bチームはオールコートプレスを続けます。Aチームはプレスをスクリーンとリターンパスで潜り抜け、得点します。そして、オールコートプレスに出ます。あわててしまったのか、Bチームのボール運びが崩れ連続得点を許します。Aチーム30-30Bチーム。

さらにBチームのボール運びが乱れてしまい、一気に逆転されてしまいます。Aチーム35-30Bチーム。残り時間2分弱。ここでBチームがタイムアウトを取ります。

タイムアウト明け、Bチームはプレスを続けます。Aチームはマッチアップエリアのノーマルマンツーマンです。Bチームはペイントドライブやポストへのパスで攻めようとはしますが、あわてているせいか、ミスが起き得点につながりません。結局、Aチーム37-32BチームでAチームの勝利でした。

私はこのゲームのクリティカルモーメントは、ズバリ出だしBチームがオールコートプレスを仕掛け、逆転しAチームのタイムアウト後に、Bチームがオールコートプレスを続けたことにあると思います。

皆さんご承知のようにタイムアウトは、悪い流れを断つこと、間を取ることで、この後の作戦を授けることです。

Aチームとしてはタイムアウトを取り、流れを切りたい。特にプレスに対する対処の仕方を徹底して、ボールをフロントコートに運びオフェンスのリズムをつくりたいという思いがあります。

Bチームとしてはプレスの勢いをさらに続けて、一気に点差を広げたいと考えたのかもしれませんが。ですからBチームは、オールコートプレスを続けたのだと思います。

私は結果論ではなく、Bチームは、タイムアウト明けの相手のプレス運びを想定して、一度マッチアップエリアからのノーマルマンツーマンにするべきだったと思います。おそらくAチームとしては、しっかりプレス対策を授けたと思いますから、そこを逆手に取って一旦ノーマルマンツーマンにして、相手のやりたいことを阻止するのが良かった気がします。あるいはハーフコートのプレスという策もあったと思います。間合いを取る意味でもハーフのディフェンスを取り入れたかったです。

私は、オールコートプレスは『諸刃の剣』だと思っています。使い方によって一気に流れを引き寄せる力もありますが、一つ間違えると簡単にボールを運ばれ、流れを失う危険性もはらんでいるからです。今回の試合では、長い時間オールコートプレスを続けたことが仇となった気がします。

私が感じたクリティカルモーメントが絶対正しいとは思いません。ただ試合を観ていて、あのタイムアウト明けの流れが頭に残ったので紹介しました。次号ではもう少し細部に触れて見ます。